



Data 2025-27

監督・脚本: ホアン・ジー、大塚竜治

出演: ヤオ・ホングイ/リウ・ロン / シャオ・ズーロン/ホアン・シャオション/リウ・ガン

👁️👁️ みどころ

本作では、まず大塚竜治とホアン・ジーという日本人と中国人の監督夫妻に注目！14歳の時、16歳の時に続いて、20歳の女優ヤオ・ホングイを起用したこの監督夫妻は、第3作目の本作で第60回台北金馬奨をゲット！

彼らのテーマは一貫して「女性の性」だが、原題も邦題も同じ『石門』って一体ナニ？それは、「女性を取り巻く環境に存在する、打ち破りたくてもなかなか突破して先に進めない壁」のことだが、20歳にして思わぬ妊娠をした娘と、死産の責任を取って賠償金を支払っている産婦人科医の母親が、賠償先の社長サンに提示した“大胆な提案”とは？

「一人っ子政策」と「男尊女卑思想」が結びついた中国では、最初に女兒が生まれると養女に出す風潮があるが、賠償金の代わりに生まれてくる子供を養子に差し出す合意（契約）の可否は？日本では明らかな公序良俗違反だが、「法治」が未熟な中国では、それもあり！？

監督夫妻は10か月かけて妊娠中の撮影も担当したそうだが、出産直前に「合意内容を書面にしてくれ」との話になると、さあ？2月21日現在ウクライナの停戦を巡る米露の交渉（急接近？）が世界中の注目を集めているが、ウクライナ抜きでの停戦合意などありえないから、その交渉が難航するのは必至だ。本作の合意もそれと同じように（？）難しいが、本作の結末は・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 日中の監督夫妻に注目！本作で多くの賞をゲット！ ■□■

私は弁護士50周年を終え51年目に入っているが、息子も弁護士なら娘も弁護士だから、まさに弁護士一家だ。それに対して、2023年11月に行われた第60回台北金馬奨で日本資本の作品として初めて最優秀作品賞を受賞した本作は、中国湖南省出身の中国人女性ホア

ン・ジーと東京出身の日本人男性・大塚竜治夫妻が共同監督した作品だ。

本作のプロダクションノートによると、ホアン・ジーと大塚竜治は共同監督の他、共同して脚本を書くとともに、この2人を含む3名という最小人数で、物語の時間経過とシンクロさせるために10か月にわたる撮影を行ったそうだ。さらに、今村昌平やリチャード・リンクレイターの手法を思い起こさせるこの撮影現場では、2人は共同で演出を行い、コロナ禍など世の中の出来事や撮影現場のハプニングすら即応して脚本に取り込む一方で、3名での撮影を成立させるため、ホアン・ジーは共同プロデューサーを兼任、大塚竜治はプロデューサー、撮影、照明を担当し、美術は2人の共同作業となった、と紹介されているからすごい。

本作を鑑賞してはつきりわかるのは、単焦点レンズでカメラを動かさずに撮影していること。大塚監督はその狙いを、「人物だけを切り取るのではなく、社会の中で彼女が立っているという構図でこの物語を伝えたかった」と語っている。また、ホアン監督は『石門』というタイトルの意味について、「女性を取り巻く環境に存在する、打ち破りたくてもなかなか突破して先に進めない壁」であると語っている。なるほど、なるほど、こりゃ必見！

■□■3人のトリオによる3本目の作品！そりゃ珍しい！■□■

私は、ホアン・ジーと大塚竜治の監督夫婦のことはもとより、本作で主演した女優ヤオ・ホングイのことも全く知らなかったが、本作は監督夫婦とヤオ・ホングイのトリオによる3本目の作品になるそうだから、それもすごい。このトリオによる1作目は、『卵と石』（12年）、2作目は『フーリッシュ・バード』（17年）だ。監督と俳優との名コンビは、中国映画では第5世代を代表するチャン・イーモウ監督×女優コン・リー、第6世代を代表するジャ・ジャンクー監督×チャオ・タオ等があるが、3作も続いて同じ監督夫婦が同じ女性の14歳、19歳、22歳の成長に対応して作品を作るのは珍しい。これはフランスのフランソワ・トリュフォー監督がジャン＝ピエール・レオを主人公に一連の作品を監督した“アントワヌ・ドワネルもの”を彷彿させるものだ。

チャン・イーモウ監督が女優コン・リーに、ジャ・ジャンクー監督が女優チャオ・タオに惚れ込み、次々と自らのミュージズを主演させる作品を作っていたのは十分理解できるから、本作では何よりも、ホアン・ジーと大塚竜治監督夫婦が惚れ込んで、今は20歳になった女優ヤオ・ホングイの演技とその魅力をはじめ確認するのが楽しみた。

■□■3作とも焦点は女性の性！本作のテーマは？■□■

私は観ていないが、ホアン・ジーと大塚竜治監督夫婦が女性ヤオ・ホングイを起用した第1作『卵と石』の主人公は封建的な湖南省の農村で出稼ぎをする両親と離れて抑圧された生活を送る14歳の少女、第2作『フーリッシュ・バード』の主人公は学校で没収されたスマホを売ったことから見知らぬ男たちと知り合ってしまう16歳の少女だ。そして、そのテーマはいずれも女性の性だ。それと同じように、本作のテーマも女性の性。女性の性をテーマにした映画は数多いが、20歳にして思いがけない妊娠をしてしまったリン（ヤオ・

ホングイ)を主人公とした本作は、どんなストーリーに？

本作導入部では、フライト・アテンダントになるための学校に入り勉強している20歳のリンが、イケメンの恋人とともにイベントの司会というアルバイトをしたり、英会話教室に通ったりしながら頑張っている姿が登場する。初めて見る女優ヤオ・ホングイ演ずるリンはなかなかの美人だから、ちゃんと勉強すればスナリとフライト・アテンダントになることは可能！それは、日本でかつて大ヒットした堀ちえみ主演のドラマ『スチュワーデス物語』(83～84年)等と対比しても明らか(?)だが、人口が日本の10倍もある中国では競争が大変らしい。

本作の舞台は湖南省の長沙市。英会話教室へ通うのをやめたいと言い始めたリンに対し、イベントの司会業等でしっかり稼いでいる恋人は「そんな姿勢ではダメだ」とハッパをかけたが、リンは「借った金は必ず返す」とピン外れな答えを。これでは2人の中の行方も怪しそうだ。そんな状況下、卵子提供のアルバイトのためにリンが病院を訪れると、何と妊娠1か月であることが判明！勉強するために学校に入ったのに、妊娠したため学校を辞めるなんて、一体何なの？長沙市の郊外で診療所兼薬局を営んでいるリンの母親(ホアン・シャオション)はそのようにリンを責めたが、そんなこと言われたって、リン自身が一体どうすればいいかわからない八方塞がり状態だ。

■□■母親も大ピンチ！そんな母親の“大胆な提案”とは？■□■

私は長沙市のすぐ近くの湘潭市にある、毛沢東の生誕地として有名な「毛沢東故居」を観光したことはないが、リンの母親が長沙市の郊外で営んでいる診療所兼薬局のある長沙市郊外のまちなみは、私が訪れた中国各地の下町風景と一致するものだ。

リンの母親は診療所兼薬局の経営者だから、その自宅兼診療所兼薬局はそれなりに立派なもの。ところが、スクリーン上で私たちが最初に見るリンの母親は、怪しげな活力クリームの販売に熱を上げているからアレレ・・・。私は、『西湖畔(せいこはん)に生きる』(23年)、『シネマ56』152頁)で観た、足裏シートの販売を巡るマルチ商法の姿にチョー驚かされたが、同作で見た母親の姿と本作で見る母親の姿は、足裏シートと活力クリームという販売商品の違いこそあれ、マルチ商法の迫力と熱量は全く同じだ。リンの父親は、そんな母親に注意を促し、ある時には大ゲンカに及んでいたが、なぜリンの母親は医師免許を持っているはずの産婦人科医の仕事をしていないの？

それは、ある時点での“母親の対話”で明らかにされるとおり、母親が産婦人科医としてある女性の出産に失敗し、医療ミスとして認めざるを得なくなったため、現在高額の賠償金を分割で支払い中であるためだ。そんな医療ミスによって、母親はそれ以降、産婦人科医の仕事を放棄して、活力クリームのマルチ販売に熱を上げ、今は診療所で集会を開ける地位まで出世することに意欲を燃やしているわけだ。

そんな八方塞がり同士の母親の会話の中で、リンが突然提案したのは、現在妊娠中の自分が近い将来産んだ赤ちゃんを、賠償先に養子として(無償で)提供すること。そのココ

口は、賠償先の両親が本当に出産時の医療ミスで赤ちゃんを失ったことを悲しんでいるのなら、賠償金を払ってもらふことより、タダで養子をもらえる方が嬉しいのでは？ということだ。そんなバカな話を提案できるはずはない！母親は一度はそう答えたが、よくよく考えれば、それも有り・・・？しかし、本作ではこの母と娘と賠償先の男（社長）との、何とも奇妙な、日本では到底考えられない、しかし中国ではそれも有りか？の“三者会談”に及ぶことに・・・。

去る1月8日に観た『夏が来て、冬が往く』（23年）では、「一人っ子政策」と「男尊女卑思想」が結びつく中で、最初に女兒が生まれると養子に出される風潮が広まってしまった中国特有の悲劇的な女たちの物語が描かれていたが、視点こそ違え、本作を共同監督したホアン・ジー、大塚竜治夫妻の問題意識もそれと同じだ。もっとも、『夏が来て、冬が往く』は養子として出された女性たちの悲しみを真正面からストレートに描いたが、本作はかなりの変化球！望まぬ妊娠に戸惑う20歳の主人公と、死産の責任を問われた賠償金支払いのため、産婦人科医としての人生を台無しにしてしまった母親が思いついたそんな提案を、「いとこのシルビアから頼まれた」と自称する賠償先の社長サンは受け入れるの・・・？

■□■合意成立！しかし、口約束だけでは履行の保障は？■□■

弁護士の私は、日本の法律（民法）では公序良俗に違反する契約は無効と教わってきたから、本作に見るリンの母娘と、死産によって赤ちゃんを失ったシルビアの代理人たる社長サンとの間での、①リンのお腹から生まれてくる赤ちゃんをシルビアの養子とする、②その代わりにシルビアはリンの母親がシルビアに支払うべき賠償金を免除する、ことを根幹とする合意は、公序良俗違反だと確信しているが、ひょっとして中国ではそれがまかり通るの？両者の合意の根幹は上記2点だが、細かくはその他にも、赤ちゃんは五体満足で健康に生まれるの？遺伝性の病気はないの？知能、容貌は大丈夫？赤ちゃんの引き取りはいつ？等々の問題点が出てくると、両者の話し合いは容易に煮詰まらないことに。

2025年2月21日現在、世界の目は、ウクライナ停戦を巡る米露首脳会談の行方に向かっているが、そこでは詰めなければならぬ問題点が山積しているから、停戦合意が難しいのは当然だ。本作に見るリン側×社長サン側の話し合いによる合意の成否の行方は、ウクライナの停戦合意の成否と同じように興味深いので、その展開を注視したい。

■□■合意成立だが合意文書の作成は？赤ちゃんの引渡しは？■□■

日本の法律（民法）では合意は口頭だけで成立するから、書面の作成は不要だ。しかし、後日の紛争を避けるために、合意した内容は必ず文書化すべきが当然で、弁護士の私は50年間それを実践し続けてきた。そんな目で、リン側と社長サン側の再三にわたる交渉で口頭での合意が成立する姿を見ていると、不安いっぱいだった。そんな心配が現実化したのは、リンの母親が合意内容を文書にしたいと申し出た時に、社長サンが「そんなことができるか！」と一蹴したこと。そりゃ社長サンやシルビアの立場がわからないでもないが、これだけ重大なことを、弁護士も入れず、また何の合意文書も作成せず、口頭の合意だけ

で処理してしまうのはあまりに不安だ。

そんな中でも、リンのお腹は次第に大きくなっていき、10か月間の撮影を経てついに出産！五体満足かつ健康に生まれたことは幸いだが、リンの母親が、「少しでも抱いたり一緒に生活したら、母子の愛情が湧き、手放すのが苦しくなってくるから、即座に引き渡したい。」と迫ったのに対し、コロナ禍でのコロナ感染を恐れる社長サンは、車の中に招き入れた母親に対して手短に、「赤ちゃんを引き取るのはしばらく先にする。連絡は追ってする。それまではリンの方で育ててくれ！」と一方的に通告した上、早々に「車から出ていってくれ！」と迫ったから、アレレ、アレレ。これは口頭で成立していた合意の一時的延期？それとも合意の白紙撤回なの？

奇しくも私の不安が的中した形だが、本作ラストは病院から出てきたリンが赤ちゃんを助手席に置いたまま、車の運転席に座っているシークエンスになる。しかし、この車は一体誰の車？赤ちゃん引き渡しの話し合いの結果はどうなったの？そんな心配をしていると、おもむろに腰をあげたリンはドアを開けて車の外へ。生まれたばかりの赤ん坊は泣き声をあげていたが、リンは「泣かないで」とやさしく声をかけたものの、それ以上、赤ん坊の方を見ることもなく、車の外へ。そして、何と本作はここでジ・エンドになったからビックリすると同時に、なるほど、なるほど。本作の問題提起は深くかつ鋭い。しかし、これからリンとその母親はどうなっていくの？

■□■安上がりな撮影ながら、鋭い問題提起に拍手！■□■

私は映画の撮影方法に詳しいわけではないが、本作の撮影は監督2人に録音スタッフが1人、あとは出演者だけで構成していると聞いてビックリ！俳優もリンの両親をホアン・ジー監督の両親が演じるなど、ヤオ・ホングイ以外は素人ばかり。さらに機材もCanonのC70に50mmレンズを1本、録音機材もドキュメンタリーなどに使用するような簡易な機材のみらしい。また、本作は詳細な脚本がないまま、リンのお腹が大きくなっていく10か月間で撮影を完了したが、その時期にちょうどコロナ禍に遭遇したため、マスク購入合戦の姿等もカメラに収めたようだ。

そんな本作の製作費は安上がりだが、問題提起は極めて鋭いので、それに注目！もつとも、本作は問題提起をするだけで回答を示していないところがミソ。というより、2人の監督にもその答えは見つけようがないはずだ。

そんな視点で考えれば、本作のパンフレットにある、①中谷祐介氏（びあ編集部）の「映画『石門』が描く“見通しの立たない歪な迷路”」、②藤岡朝子氏（山形国際ドキュメンタリー映画祭理事）の「飛び込んでくる現実との共作」、③吉川龍生氏（慶應義塾大学教授）の「開かない扉と止まない雨」という3本のREVIEW、さらに、工藤将亮氏（映画『遠いところ』監督）の「映画が投げかける問い “石の扉”とは一体なんなのか？」は必読！

2025（令和7）年3月11日記